

第 106 回 地域まちづくり推進委員会横浜市民まち普請事業部会 会議録

日時	令和 6 年 2 月 27 日 (火) 10:00~12:00
開催場所	横浜市役所 18 階会議室 みなと 4
出席者 【敬称略】	部会委員) 杉崎部会長、朝比奈委員、植松委員、川原委員、後藤委員、肥後委員、 松村委員、山田委員 事務局) 横浜市：榊原、村瀬、安藤、石田、秋浦、古谷 市民セクターよこはま：加世田 横浜市住宅供給公社：岡部、佐藤、土屋、高橋
開催形態	公開
議題	(1) 2 次コンテスト振り返りについて (2) まち普請事業におけるコーディネーターの役割や課題について (3) 地域まちづくり推進状況報告書・評価書・見解書の作成について (4) まち普請事業の課題認識や実施している取組、今後の検討のたたき台について
報告事項	(1) 令和 6 年度まち普請応援企業について (2) 令和 5 年度整備状況について (3) 令和 6 年度の提案募集の広報と相談状況について (4) 令和 6 年度スケジュール (案) について
決定事項	なし

議事

事務局 松村委員	1 開会 2 議題について (1) 2 次コンテスト振り返りについて 「資料 1」を説明 アンケートに記載の「最終審査まで審査員の理解が進んでいないことに驚きました。6 票推薦されても、採用されないのは審査方法に問題があると思います。」というコメントについて、部会委員が 2 票もっていて、全員が 1 票だけでは不通過と理解して、投票した。一方で言葉では、1 票は「推薦する」と説明しており、今回のケースでは部会委員の過半数が推薦している見えるので表現の仕方を変えたほうがいいと思う。
杉崎部会長	やり方は変わらないので、表現の仕方でも誤解がないようにしたいと思う。
事務局 杉崎部会長	(2) まち普請事業におけるコーディネーターの役割や課題について 「資料 2-1 及び 2-2」を説明 資料でコーディネーターの役割やスタンスを見ると、コーディネーターはまち普請の影で重要な役割を担っている。グループとコーディネーターの関係により、コンテストがクリエイティブに行われるか決まるところがある。一方で、大事な存在にもかかわらず審査員も制度を理解していないところもある。ただ、コーディネーターはまち普請だけの仕組みではなく、地域まちづくり支援制度があって、それをまち普請にも

	<p>当てはめているものなので、まち普請事業部会だけで議論できないこともある。今日は結論を出すというよりも現状を共有して、話をできればと思っている。</p>
川原委員	<p>第 104 回部会で問題提起した意図は、私自身もまち普請においてコーディネーターの役割は重要だと思っているが、コーディネーターも世代により考え方が変わってきている。コンテストで応援企業の PR がうまくできたように、コーディネーターにとってももっと意義のある事業になるようにしていかなないと、まち普請への関心やお金以上の働きに対する納得感を得られないのではないかという気持ちがあったので提起した。今、提案された改善案について、良いと思った。若手コーディネーターの発掘について、お金や負担感というよりも、関与することへの魅力を考えていけると良いと思う。それについてはまち普請部会委員がコーディネーターともっと議論をしたほうが良いと思う。部会委員の中には市民活動の経験者も多く、若手コーディネーターにとっても意義がある場になると思うので、部会委員と若手コーディネーターの議論の場というのもコーディネーターにとって魅力になるのではないか。そこから得られた気づきなどをまち普請をより良くしていくために活用できると思うので、そういう機会があると良いと思う。</p>
杉崎部会長	<p>グループのサポートをしているコーディネーターを見える化するというだけでなく、まち普請事業全体をどうしていくかといった議論を含めて、コーディネーターと議論する場を設けたらいいのではという提案。</p>
川原委員	<p>例えば、まち普請をいかにマンネリから脱して面白くしていくかということを考えるときに、その議論に若手や中堅コーディネーターが参加していると、コーディネーターにとっての面白さもそこに反映されると思う。そういう議論を日常的に部会委員や事務局とできるようにしていく場を設けることが大事なのではないかという趣旨。</p>
杉崎部会長	<p>現場でまちづくりの種を拾ってくる役割を担うコーディネーターと情報共有する場を設けてもいいのではという提案。その他、資料に抜けている論点があれば出してほしい。制度としては地域まちづくり支援制度全体の議論があると思う。活動助成金のうち 10 万円はコーディネーターに使うということをグループが理解しているのか疑問。コーディネーターへ期待したことや付き合い方など、そのあたりはどう進めていったか。</p>
山田委員	<p>私が平成 25 年度に提案した「こまちカフェ」はコーディネーターとはあまりうまくやりとりできなかった。市職員のアドバイスや伴走がありがたかったが、コーディネーターにどうサポートしてもらえればいいのか分からなかった。</p>
杉崎部会長	<p>市職員の伴走とコーディネーターの伴走の相性や濃淡に関心がある。コーディネーターに支払いはしたのか。</p>
山田委員	<p>費用は支払った。打合せへ参加してもらったので、そこに対して費用は発生したが、そこでのコーディネーターからのアドバイスで何か大きく変わったことなどはなかった。当時の私たちにとってはスケールの大きい話が多かったので、自分たちの活動に沿っているという感じではなかった。市職員が「なぜ、何のために、それをやるのか」ということを何度も言ってくれて、目的と手段を整理することに力を貸してくれたこ</p>

	とがとてもありがたかった。
杉崎部会長	図面の作成など技術的なサポートはどうしたのか。
山田委員	コーディネーターに図面作成は依頼せず、知り合いに依頼した。整備場所が決まらなかったで、なかなか図面作成にたどり着けなかったというのものもある。
川原委員	事務局の案はコーディネーターにどういう作業を頼めるのか、その時の費用などが提示されることはとても良いと思う。専門家に何を頼めるのかが見える化されると良い。お金とは別に、これまではこういうことを頼んでいたといった事例があったりすると良いかもしれない。
山田委員	誰に何をどう頼んでいいか、グループはよく分からない。自分たちにとって何が必要なのかを見極めるのも難しい。
川原委員	コーディネーターの経験からグループが選べるような資料があると良い。
杉崎部会長	こまちカフェはコストを意識していたので、人を呼んだら払わないといけないという感覚があったと思うが、そういう感覚がグループ全部にあるわけでもないということが資料でも書かれている。
肥後委員	私たちが平成 28 年度に提案したときは1次コンテスト通過後にコーディネーターを選べるわけではなかった気がしている。農や緑の活動に詳しい、特定のコーディネーターを紹介された。特に説明がなかったのでコーディネーターがなにをしてくれるのかイメージできなかった。図面は不要だったことと、グループ内に書ける人がいたのでお願いしなかった。打合せのなかで生態的なアドバイスなどをしてくださった。提案内容をどうやってコーディネーターのビジョンにあわせていくかは、グループ内の課題によって違うのではないかな。
植松委員	私たちが平成 25 年度に提案した際は山田委員、肥後委員とは違う感じだった。コーディネーターを決めようとしたときに3人を推薦してもらった。顔合わせをして二人目の方に決めた。今年度の2次コンテストにそのコーディネーターが来ていて久しぶりに話をした。私たちは図面作成ではなく、防災備蓄庫とまちづくりのつなげ方についてコーディネーターが機能した。模型作りやまちあるき、歴史まとめ、アンケートなど多くのアドバイスをもらい、それが最終的にうまくまとまって、2次コンテストを通過した。まち普請の後、まちづくりプラン策定の際はコーディネーターのスタンスが違うと思い、そこからは市に伴走支援をしてもらった。
杉崎部会長	コーディネーターされる側の話も聞けたと思うが、コーディネーターする側の意見としてはどうか。
松村委員	一点目は、活動助成金 30 万のうち 10 万はコーディネーター費用に充てるという制度が分かりにくい。市からコーディネーターの派遣があるのであればそれを使ってもいいのではないかなと思った。もう一点は 30 万円の使い方が、コーディネーターがグループに入る際には決まっていない。計画性がないままに2次コンテストに向けた活動が始まっている気がしている。市職員とコーディネーターとグループで話をし、お金の使い道を確認したうえで使い始めたほうがいいのではないかな。活動助成金の使い方について、グループとのすり合わせが十分でない気がした。

朝比奈委員 事務局	<p>コーディネーターが入らないケースもあるのか。</p> <p>グループによるのでコーディネーターがない事例もある。コーディネーターにお願いする場合としない場合があり、お願いしない場合であっても活動助成金は30万円という制度だったものを、コーディネーター費用として10万円が使用可能、お願いしなければ20万円がその他の費用に使用可能という制度設計にした。なおかつ、コーディネーターは過去に市のまちづくりコーディネーターの登録者でない方がグループの支援についてあったので、まずはコーディネーター登録をしてもらい、事業説明などを行い、市のまちづくり制度やまち普請を理解してもらうようにしている。</p>
肥後委員	<p>1次コンテスト通過後にコーディネーターとマッチングした後に一度話し合うことで、10万円を払うかどうかを決めたらしくりくるのではないかと。課題に対して何をアドバイスできるのかを話し合ってから決めていくと良いと思う。</p>
朝比奈委員	<p>コーディネーターの役割の中で、組織作りや事業性に対する助言がプロセスの中で重要度が増しているのではないかと考えている。それがコーディネーターの役割なのか、どこまでがコーディネーターの範疇なのかというのが難しくなっていることを感じる。まちづくりの概念が広がっている中で、コミュニティビジネスに近いものを求めているかもしれないし、そのあたりをどこまでサポートできるかは考えてみるべきだと思う。</p>
杉崎部会長	<p>かなり手厚い伴走支援で、グループの主体性が「コンテストに通過するため」ということに引っぱられたりしないのか、そのあたりの現場が分からない。まちづくり活動なのでどこまで自分たちが頑張れるのかという話がある一方で、コンテストに通過することを目的とするのかなど、かなり悩ましいと思った。</p>
川原委員	<p>グループがコーディネーターを選ぶことはなかなか難しいと思うが、プロフィールリストなどは載せているのか。</p>
事務局	<p>コーディネーター登録簿をHPに掲載している。</p>
杉崎部会長	<p>実際にはそれだけでは分からないので、市職員が候補を紹介している。</p>
事務局	<p>グループが自分たち自身の課題が分からないというところもあるが、ほしいアドバイスなどをヒアリングして、それに合いそうなコーディネーター候補を紹介している。</p>
川原委員	<p>例えばコーディネーターに過去のまち普請事業でやったことを書いてもらおうと、まち普請に特化して、やれることやってもらえることが明確になる気がする。</p>
事務局	<p>すでに登録簿にそういった記載がある。</p>
川原委員	<p>こういった登録簿はグループの参考にならないのか。</p>
事務局	<p>登録簿を参考に、似ている活動などを探して、コーディネーターを指名するグループもいる。</p>
杉崎部会長	<p>コーディネーターの役割は、打合せへの参加だけでなく、資料作成やファシリテーション、事例の提供など多岐に渡ると思う。</p>
山田委員	<p>整備してでき上がったものに対して、コーディネーターがどのようなことをしたのか文字化されても分かりづらい。コーディネーターは専門性が高いと思うが、でき上がっていくものに対してどう繋がっているのかが分かりづらい。通過グループが予算な</p>

事務局	<p>どどうしているのかなどを知りたい気持ちはよく分かるし、ヒアリングされることもある。また、10万円はコーディネーターにしか使えず、その費用をほかの方に何かを頼むことには使えないのはどうしてかという意見も聞いた。</p>
事務局	<p>グループとコーディネーターのマッチングの視点が足りなかったと思うので、今後検討していく。</p>
川原委員	<p>若手や中堅コーディネーターが、提案グループが何を求めているのかをちゃんと受け止めているのか気になる。負荷やコストの話が出がちだが、どういう支援をしてほしいといったニーズに対して、プロとして中堅コーディネーターなどがどう理解しているのか気になる。ベテランコーディネーターはすべて受け止めるといったスタンスの方も多いと思うが、中堅コーディネーターはそういう方ばかりではないと感じる。</p>
肥後委員	<p>コーディネーター自身が、自分達の役割を分析しているのか。場所探しやグループ内でのコンセンサスの取り方、課題解決に対する導き方など課題別の分析をして、共有できればコストパフォーマンスの問題にならないのでは。</p>
杉崎部会長	<p>気になるのはコンテスト通過が成果なのかということ。市民活動なので、成果はむしろそこまでのプロセスを把握できるかということだと思う。</p>
事務局	<p>ヒアリングしたベテランコーディネーターはまち普請の仕組みを一緒に作った方々なので当初からまち普請のスタンスを共有している。中堅コーディネーターは現役で稼ぐ必要があるので、違いがあるのは当然。コストパフォーマンスやコンテスト通過のためのチェックリストについて話をしている人もいるなかで、そういう人とどう関係をつくっていくかは非常に大事だと思った。</p>
杉崎部会長	<p>コーディネーターも世代が変わっていく中で、この制度設計だとさらに若手や新規のコーディネーターが入ってこないのではという懸念がある。</p>
後藤委員	<p>コーディネーターのアピールは大事だと思う。気になったのは、コーディネーターのグループへのかかわり方は様々と資料に記載があるが、毎年コーディネーターから報告書のようなものはもらっているのか。</p>
事務局	<p>今は特に求めていない。</p>
杉崎部会長	<p>コーディネーターの支払いは市からではなくグループからとなっているので、今はもらっていないそう。しかし、簡単に報告をもらっても良いと思う。通過不通過にかかわらずこういう課題があったということや難しかったことなどだけでもいいのではないか。</p>
後藤委員	<p>打合せへの参加頻度や模型作成など、どれくらいコーディネーターのかかわり方にバリエーションがあるか分からないと思ったので、簡単なレポートがあってもいいのではと思った。</p>
松村委員	<p>NPOの組織基盤強化のためにいくつかの団体に行ったときに、基盤強化のための助成金30万円を何のために使うのかということを整理するためのワークショップがあり、その後自己評価をするための振り返りのワークショップをやり、報告書を提出している。まず始める前に整理が必要であることと、10万円は市からの支払いとしたほうが整理しやすいと思う。</p>

事務局	事務局の中でもそういう議論をしたが、そもそもグループから支払いをしているというのは、グループがまちづくりを進めていく中でグループ自身がいろいろと考えて、お金の使い道も含めて検討してもらうために渡しているという基本的な考え方がある。
杉崎部会長	松村委員の話は、制度が分かりにくいので切り分けたほうがいいのではということだと思う。これからどうしていくのかということ議論する場を最初の1回設けるというやり方もあるかもしれない。継続性の前に最初の整理も大事だと思う。まちづくり支援制度全体の中のコーディネーター制度の検討も含めた話だと思うので、全体と合わせてまち普請部会でも逐次報告してもらいたい。
事務局	(3) 地域まちづくり推進状況報告書・評価書・見解書の作成について 「資料3」を説明
事務局	(4) まち普請事業の課題認識や実施している取組、今後の検討のたたき台について 「資料4」を説明
杉崎部会長	資料4について、右欄はこれから様々なアイデアを出していくと思うが、左欄について、記載されているもの以外の課題を出したいと思う。場合によっては評価書に入るかもしれない。
川原委員	今のまち普請事業で対応できるかは分からないが、私自身は、各地で地域の人たちとこんな街にしたいといったことを議論して、フロートビジョンと呼んでいる「なぜやるか、なにをやるか、どこでやるか」ということを絵姿として描いて、どういう予算でどうやっていくかは後追いで動かしていくといったことをやっている。そういうやり方はタクティカル・アーバニズム的だと思う。やりたいことが明確にあって、例えば民地を含む公共空間を活かしてまちづくりを進めようといった、いわゆる拠点型でないときに、社会実験でニーズや安全性などを得て、それを踏まえて合意形成をしていくプロセスを踏むときはやはり社会実験に1年くらいかかる。それを踏まえて整理をしていこうとなると2年くらいかかるが、今のまち普請だとそれはできない。まち普請に提案すると、合意形成が終わっていないとできないわけではないが、地域で展開するためには1年間の社会実験年度があって、そこで良いとなったら、その次に整備となるとコンテスト通過後に2年程度ほしい。そういったことには対応できていない。だから、拠点がやりやすいのかもしれないと思った。整備年度を長くとることができるのか。
杉崎部会長	1次コンテストから2次コンテストの間を長くすることで対応できることもあるかもしれない。
川原委員	1次コンテスト通過後に、翌年の2次コンテストに挑戦するなど。社会実験年度に予算がないので、何かやりたくてもお金がない。そういうことにまち普請は使えない。
杉崎部会長	1次コンテストから2次コンテストの間に社会実験することをダメとは言っていない。ただ、時間が短い。
川原委員	時間も短いし、予算20万円でできることも限られる。
杉崎部会長	想定していないプロセスの提案の仕方も検討したらいいのではという提案。

川原委員	今のプロセスが割と単独の拠点事業には対応できるが、公共空間を含めた提案などそれ以外には実は対応していないのではという投げかけ。
杉崎部会長	道路管理者や警察などと交渉すると今のようなスピード感ではできないといった話も含めて、現状の1次コンテストである程度イメージを固めて提案を進めていくといったプロセスではない提案がありそうということも検討したほうがいいのではないかと いう投げかけだったと思う。
松村委員	事務局からコーディネーターの世代やコストパフォーマンスの話があったが、提案を進めていく中でマネジメントをしていく人は大変。時間や能力をかけても、コストの課題などはなかなか難しい。若い人が戦略を立てて、今後を引き受けていくためにも半年くらい一定の人件費を出せるようにすると、ハードルが下がり、やる気ができるのではないかと思った。無償のボランティアが当たり前になっているが、それでやりきれなくなってきているのは確か。やりがいのためにすべて無償というのは若い人たちのコスト感覚には厳しい。そこをどうやって充当していくのかを考えても良い時期だ と思う。
杉崎部会長	整備後や整備前の助走支援を含めて、どう充当していくのか。いきなり人件費も含めて稼ぐことは難しいので、少しの最初の期間だけは支援する、という考えもあるかも という提案。
肥後委員	まち普請当初からの時代の変化は否めない。トップダウンで志の高い人がまち普請を活用してまちづくりを進めていくのは良いと思うが、なかなかそういった気概を持った人はいない。何か仲間やろうとしても町内会などの壁があるケースもある。実証実験するにしても余裕がないと、結果を求めているのかプロセスが大事なのかという話になっていると思う。今はやり方が多様にあるので、そこでまち普請に向かわせるように違う仕組みが必要だと思う。
杉崎部会長	合意形成をどの段階でどれくらい求めるかとか、それを育むプロセスなど。
肥後委員	ハード事業ではなくなっていると思う。
杉崎部会長	1次コンテストから2次コンテストまでの長さが短いのだろうか。
肥後委員	時間が短いのか、理解不足なのかよく分からないが難しくなっている気がする。
杉崎部会長	1次コンテストの前をもう少し丁寧にといい考えもあるかもしれない。
肥後委員	その種をだれが拾うのかということもある。
杉崎部会長	1次コンテストより前、もしくは1次コンテストから2次コンテストの間で仲間が集まって地域を巻き込むという話と、実証実験でイメージを共有して合意を得ていくといったプロセスが入れられたら良い。ハードルの高さはいろいろな意味があると思う。書類が少なくなることで応募しやすくなるわけでもない気がする。
肥後委員	500万円の使い方も難しい。人件費を含まないが、ボランティアで支えているところが大きいと思うので、そこまでしてやるかというところのハードルが高い。確固たる目的があって、担い手がいて、継続するシステムがないと応募も難しい。
杉崎部会長	審査する側はあれくらいの書類と丸1日のコンテストの時間がないと決められない。簡素化すればいいということでもない。

植松委員	ハード以外の整備に移行する必要があるのかもしれないといった話が出たが、ハードは一度作ると維持管理が発生するので、ハードはもちろんのことソフトの面を主体にしたまち普請事業がそろそろ求められるのではないかと。活動していくと自治会などの地域の壁があるとの話もあったが、地域もやる気があって、そういう意味ではやりたいうことを投げかけてもらえればそれに対して協力してくれる人や体制は多くある。そういう自治会などは組織として十分立ちうる。防災や子育て支援に特化した投げかけをするのも一つの手だと考えている。
杉崎部会長	一つ目は、まち普請はハードに対する助成だが、それを実現するためのソフトにもお金が出るといいよねという話。
植松委員	例えば地域財産の利活用と人を呼びこむシステム作りといったソフトへのお金がつくといい。
杉崎部会長	まち普請なので整備はもちろんあるが、整備にリソースをかけすぎず、ソフトな活動がむしろ主であることも有りうるかもしれない。
植松委員	自治会も若い世代に代わりつつあるので、大いに耕す素地はある。
杉崎部会長	重点募集する特化したテーマは周知もしやすいし、きっかけになりやすい。ひとつのアイデアとして良いと思う。
川原委員	我々が使えるアイデアを投げかけていくのも良いと思う。子育てプラスもその一つだと思う。地域資産を継承するのに困っている人や遊休農地など、そういうタネは多くある気がするが、それがまち普請と繋がらないと思われてしまっているのであれば、使い方をこちらがアピールしていくというのはあると思う。そういう関心のあるところに営業する。そういうのを中堅コーディネーターと議論してみるとモチベーションもあがるかもしれない。
杉崎部会長	それを発信するコンテンツを作ったほうがいい。
事務局	まち普請でなにができるかという点と地域まちづくり支援制度全体でなにができるかという点で考えていきたいと思う。
	3 報告について
事務局	(1) 令和6年度まち普請応援企業について 「資料5」を説明
事務局	(2) 令和5年度整備状況について 「資料6-1及び6-2」を説明
事務局	(3) 令和6年度の提案募集の広報と相談状況について 「資料7」を説明
事務局	(4) 令和6年度スケジュール(案)について 「資料8」を説明
資料	
(資料1) 令和5年度2次コンテストアンケート概要	
(資料2-1) まち普請事業における、まちづくりコーディネーターの役割について	
(資料2-2) 「令和4年度事業改善検討ヒアリング」で提示された、コーディネーター制度の	



課題について

- (資料3) 地域まちづくり推進状況報告書・評価書・見解書(案)
- (資料4) まち普請事業の課題認識や実施している取組、今後の検討のたたき台について
- (資料5) 令和6年度まち普請応援企業について
- (資料6-1) 令和5年度整備施設状況について
- (資料6-2) 地域の居場所・情報拠点となる「町カフェ城郷ノスタルジア」が完成(記者発表資料)
- (資料7) 令和6年度の提案募集の広報と相談状況について
- (資料8) 令和6年度事業スケジュール(案)